

阿弥陀三尊図の現状模写及び装潢

博士前期課程 日本画領域 加藤正晴

《原本について》

「阿弥陀三尊図」 100.6×46.5 cm 鎌倉時代 愛知県美術館蔵(木村定三コレクション)

来迎図とは、西方浄土より阿弥陀如来が聖衆を引き連れて往生者を迎えに来る様を描いたものである。本図では、踏割ふみわり蓮台れんたいに乗った阿弥陀如来が観音菩薩、勢至菩薩を従えて左上から右下に来迎する様を描いており、笠後光と呼ばれる円形の頭光が描かれているところが特徴的である。三尊形式の来迎図は鎌倉時代後期以降同型式が大量に制作されているが、時代が下るにつれ形式化進み平板的、説明的な表現の作例も多く見られる。三尊の着衣には、卍まんじ 繫ぎ文、雷らい 文繫ぎ文、麻葉繫ぎ文、立涌文、格子文、籠の目文、唐草文、青海波せいがいば 文などの文様が精緻な截金きりかねで表現している。

今回、その截金文様を再現するために、伝統技法である截金を学び実践することとした。また、できる限り当時の制作手法に近づけ少しでも古人の絵画への想いを学び取ることができればと考え模写に取り組んだ。

《模写の工程について》

1. 上げ写し

ドーサ引きした薄美濃紙を用いて、原寸大カラー写真を元に上げ写しを行った。線描、截金部分は濃い墨、剥落は焼白緑で写し取った。

2. 基底材の準備

原本に近いと思われる手織り風機織りの絹を矢車で染めた後、明礬みょうばんで媒染し古色付けを施した。絹目を詰め平滑にするため8時間きぬた 砧 打ちをした後木枠に張り込みドーサ引きをしてしみ止めを行った。

3. 絹上げ

上げ写しをした薄美濃紙をパネルに張り込み絹の裏に当てて墨で線描、焼白緑で剥落を写し取っていった。

4. 肌裏

肌裏打ち用の紙は、表からの印象を損なわないようにするため薄美濃紙を矢車で染めた。

5. 色合わせ・彩色

制作途中で原本の熟覧を行い、カラー写真を元に制作した色見本と照合してパステルにて微調整をした。さらに絵具の厚みと粒子の荒さ、截金の幅の確認を行った。その後、色見本を参考に裏彩色を施した後、表から彩色を行った。使用された絵具が不明な箇所は、類例を参考に色見本を作成しながら彩色を施した。

6. 截金

三尊の着衣に金泥を施した後、截金を施していった。あらかじめ焼き合わせておいた金箔に古色付けをし、箔板の上に置いて竹刀で細く線状に截っていき、(細い箇所で約0.3mm、太い箇所で約0.6mmの截金が施されている。)慎重に貼り付けていった。

7. 仕上げ

截金と彩色の調子を整えながら仕上げた。

8. 装潢

本図は仏画であるため仏仕立て二段表具とし、作品の印象を損なわないように中廻しの金襴は矢車で染め、上下は高野裂を選んだ。

《まとめ》

今回の研究では、3回の熟覧をする機会に恵まれたため、原本とじっくり向き合い、一つ一つの工程を吟味し、原本の持つ崇高さを感じ取りながら模写や研究に取り組むことができた。また、着衣の文様を截金にて再現したことによりその荘厳効果を実感することができた。



・砧打ち



・上げ写し



・裏彩色(反転)



・彩色



・完成



・截金